

ファミリービジネスFB研究所 沖縄本部第一回勉強会の模様

7月6日、標記勉強会が開催されました。当日は、まずファミリービジネス研究所会員で創業120年の歴史を持つ琉球泡盛メーカー瑞泉酒造を、比嘉沖縄本部会長を含め研究所会員企業関係者10数名が訪問し、泡盛の歴史・製造方法等に関し佐久本稔社長から説明を伺いました。その後、場所を那覇市内のホテルに移し、佐久本社長の講話、質疑応答とランチをはさみ約2時間活発な議論が行われました。

- ◆ 勉強会の立上げにあたって比嘉会長(リウボウ会長)から「ファミリービジネス研究所沖縄本部会員企業は、事業においても様々な連携を行っているが、今日新たに始まる勉強会を通じてお互いがより高まり、地域の文化に関わっているという誇りを持ちながらお互いの事業が継続的に発展していくことを期待している」との祝辞がありました。



(佐久本社長講話の要旨 -1/2-)

- 泡盛は15世紀頃から飲まれており、財源として貴重であった琉球王朝時代を経て、琉球処分以降は自由競争次代に突入した。全麹、黒麹仕込み・常温蒸留が泡盛の特徴である。原料として用いられているタイ米も試行錯誤の末、昭和初期から使われている。
- 酒造所は復帰の年から48で変化がないとよく言われるが、ピーク時には760の免許が発行されていた。酒税法が変更されるたびに退出を余儀なくされる業者がでて、酒造所数も変化したのである。
- 瑞泉は、首里城にある泉の名に由来し、輝かしい泉の意味がある。昨年末に社長に就任した自分は5代目の社長になる。第二次大戦時の地上戦で地下タンクしか残らないほど打撃を受け、戦後首里で再興した酒造所はわずか4社だった。戦後直後は量り売りをしてしたが、コーラ等の空き瓶に入れて売るようにしてから爆発的に売れ始めた。さらに2000年の九州沖縄サミットや2001年のNHKドラマちゅらさん放映で知名度が一気に高まり、業界全体としての県外出荷比率は6%から25%までに上昇した。瑞泉の場合には既に45%が県外出荷となっている。

(佐久本社長講話の要旨 -2/2-)



- 今後の経営課題は、2012年5月に期限切れとなる復帰特別措置法への対応。その場合には沖縄県内で安価な県外焼酎やリキュールの販売が大きく増加し、泡盛業界は大きな打撃を受けることが必死である。このため、業界全体として共同古酒貯蔵施設である古酒の郷を創設したり、海外市場開拓にも努めている。
- 瑞泉では毎月1つ新商品を開発している。これは季節感をもった商品に対する消費者のニーズを受けたもの。開発にあたっては、トップダウンでなくボトムアップで市場情報をどのように取り込むかが重要。
- 事業の承継は10年スパンで解決策を練り、実行した。これは先代が理解を示してくれたおかげ。今後は次の承継をにらみ持ち株会社方式等も検討していきたい。また、技術の継承は特に難しいが、大学院卒の人材を採用するなどして取り組んでいるところ。
- 金融機関は、古酒在庫資金を融通する観点から動産担保融資に取り組んでくれるなど前向きに対応してくれている。今後県外・海外市場での販売強化を考えるとこうしたサポートはありがたい。

以上